

座談会：「むなかた電子博物館」の現在と未来

—考古学者 西谷正先生を囲んで—

出席者

西谷正先生 *1)、加藤和歳先生 *2)

平井正則、伊津信之介、平松秋子、清水比呂之、上田めぐみ、星野浩司、西高志
(「むなかた電子博物館」紀要委員、スタッフ)

2月17日紀要発行委員 平井・伊津・平松・清水・上田・星野、西は創刊号のトップ記事として、考古学者西谷正先生を囲んでの座談会“「むなかた電子博物館」の現在と未来”のテーマを胸に九州歴史資料館を訪ねました。

館長の西谷 正先生・主任技師の加藤 和歳先生と委員との議論は予定の一時間をこえて続けました。お忙しい中、お二人の先生方には率直なご意見や委員からの矢継ぎ早やの質問、意見に応じて頂き、創刊号を飾るに相応しい、新鮮な議論となり、委員にとって楽しいひとときにもなりました。

両先生から紀要作成への励ましも頂き、ここから出発！と紀要刊行の意欲を鼓舞された次第です。

読者諸氏の皆様には「むなかた電子博物館」の記念すべき創刊号のこの座談会をご一読頂き、あらためて、皆様にも「むなかた電子博物館」の現在と未来を考える機会として頂きたいと思います。(以降、発言者の敬称は略させていただきます。編集は平井が行いました。)

*1) 西谷 正；九州歴史資料館館長、世界遺産登録活動専門家会議座長

*2) 加藤和歳；九州歴史資料館学芸調査室・主任技師(保存科学)

1. 「むなかた電子博物館」の印象

— 出席者自己紹介に続いて —

平井：最初に、「むなかた電子博物館」をご覧になったご感想いただきたいと思います。

西谷：今日はようこそお越しくださいました。「むなかた電子博物館」のことは、私も話題になったときに新聞に大きく取り上げられたので存じてはおりますが、パソコンとかIT関係は、携帯電話以外一切だめなものですから、実はいままで



「むなかた電子博物館」を見たことは無かったんですけど、今朝、学芸員に見せてもらいました。

こちらは学芸員（主任技師）の加藤と申しますけれども、もともと考古学出身ですが、今は文化財を科学的に保存するという保存科学ですね。宗像市の田熊で青銅器が出たときにも、どうやってうまく取り上げるかなどの問題で少しお手伝いさせていただきました。今日はちょっと助けていただこうと思ってきてもらっていますので、よろしくお願いします。

平井：普通の博物館とは少し違いますので、特に先生には考古学者としてのご意見ご感想をいただければと・・・。

西谷：今宗像市でずいぶん話題になっていますし、私だけじゃなく、私たち考古学界で話題になっております田熊石畑遺跡のことについてですね。そのことが電子博物館に出ておりましたので、ずいぶん最新のデータを発信しておられるなということを感じました。その辺は大変ありがたく、電子博物館ならではの効果的な情報発信だと思いますね。

ただ世界遺産については出ていますか？今日少し検索しましたが、すぐに見つからなかったもので。

平井：沖ノ島特集があります。

西谷：沖ノ島特集は見ました。沖ノ島の内容は色々書いてありましたが、世界遺産という言葉が出てこなかったですね。

清水：そこはすみわけをしておりまして、市の公式サイトとしての沖ノ島のサイトと「むなかた電子博物館」。「むなかた電子博物館」でも沖ノ島についての解説は掲載しておりますが、世界遺産については世界遺産用のサイトということで切り分けております。

西谷：世界遺産について何か最新のデータが入っているかと思って探しましたが出てこなかったものですから。速報性と申しましょうかね？UP to DATEの情報を流すという意味では先ほどの田熊石畑は大変ありがたいです。そのような形で情報発信してもらえればと、そんな感じを受けました。

加藤さん。ごらんになったご感想は？

加藤：私やもっと下の世代になると、インターネットで情報を検索するケースがほとんどで、今、大学生が論文を書くにしてもインターネットで検索して書く。私の頃は、図書館にこもってひたすら本を探した時代ですけれども、今の時代、電子博物館のようなサイトがあると、きっかけになりますし、入り口がかなりたくさんあるなと思いました。



今までですと、宗像市について調べる時には図書館で一つずつ見ていかないとはいけなかったところが、一つのサイトが宗像市についての色々な分野の入り口になっているというのも、電子博物館の効用をすごく感じたところです。

西谷：世界遺産といいますと、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」ということですがけれど、宗像沖ノ島に関しては、ずいぶんと高度な水準の高い情報がいっぱい入ってありましたので、すばらしいなと思ってありがたく拝見しました。

平井：ものがあって、人が見ていくというのではなく、もっと見るために自分で出かけるでしょう。そのきっかけを作るとか、建物があって物があるというのちょっと違った部分についてお聞きします。

西谷：非常に大事なことだと思いますね。

昨年、宗像で世界遺産が話題になっていることもあって、ツアーをご案内したことがあるんです。首都圏の方が多かったんですけど、こういうところを見学しますという案内がきますよね。そうすると、インターネットでずいぶん下調べをしてこられるんです。ですから現地の遺跡なり史跡なり、あるいは神宝館の国宝を見ることがになった時に、情報をずいぶん集めて下調べをされるということもあるし、情報をつかんで、じゃあ行ってみようかということになりますからね。やっぱり非常に重要な要素というか意味を持っていると思いますけどね。

平井：ではその次に、今まさに出てきた物を電子的にいわゆる写真などを見せるということで、実際に並んでいる博物館と違いがあると思うんですね。

そういうものがどうあったらいいかという問題があります。おっしゃるように自分が行ってみようと思ったり、情報収集としての役割も果たしますが、もしも本物が無いとしたら電子博物館としての自立的な効果というか評価が無いといけない

と思うんですね。このことについて、例えば物なしということが考えうるのかということのご意見をいただきたいと思います。

西谷：それはやはり今申しましたように、史跡・遺跡にしる、国宝のような文物にしても、「百聞は一見にしかず」ですからね。実物を見ることは第一義的だと思いますが、事前に情報を得るという意味では、重要な役割を果たしていると思います。

例えば、宗像の沖ノ島に行くのは簡単なことではありませんし、ましてや女人禁制ですから、そういうときに沖ノ島の自然・地形・動植物など、またそこで信仰された祭祀・遺跡、現在ある神社ですね。行けない、上陸できないということを前提に、グレードアップと申しますか、情報を確かなもの、豊かなものにしていただくということで、沖ノ島はいい例ですね。簡単に行くことができませんし、そういう意味では重要な役割を果たしますね。

平井：かなり重要な部分を補填することができるということですかね。

西谷：そういうことですね。

2.見えないものが見える博物館

平井：顕微鏡でそういうものをみたり、色々な向きから見るとのことなど、機能については努力していますが、陳列していても見れないようなものが、取って見るように見れるということについて努力することは効果的です。おっしゃるように普通見れないものを見せられるという点での補完的な意味合いがありますよね。

西谷：そういう意味では加藤さんが専門ですけど、表面からは見れないところをレントゲンで見たりするなどどんどんやっているわけですね。

平井：行って、見て、帰ってきても勉強ができる場所がある。

西谷：それは大きいですね。

加藤：そうですね。普通では見られないものを比較的よく見っていますが、顕微鏡で大きくして見ると肉眼では見にくいものも見ることができます。そういったもの

は、一昔前ですと顕微鏡で覗くだけだとか、写真を撮ってもフィルムしかありませんでしたが、ここ4、5年ぐらいデジタル化が進み、データを加工するなどして、使いやすくなっていますので、ありえない映像や画像が、わりと簡単にできるようになってきているのではないかなと思います。

西谷：デジタルの特性というかそれをフルに活用ということでしょうかね？

平井：でも非常にお金がかかるなどの問題がありますが。

伊津：私は海洋地質学の分野で、20年ほど水深3,000、4,000mの深海底から岩石を取ってそれを分析するという仕事をしていました。実際にカメラを下ろすとか、ビデオを撮影するとか、海底で取れた現物は上がってくるけれども、それがどんな環境にあるかということは、情報でしかわからないわけで、世の中には情報と現実。この二つが常に密接に関係するなと感じました。

今はコンピュータを教えることが専門になっていますが、電子博物館の話が出たときに非常に関心があったのは、まず健常者、いわゆる情報のやり取りに問題がない方と、障がいのある方との違いがある。そして障がいのある方が博物館に接点を持つためにはインターネットが非常に有効だということですね。情報は、インターネット上で離れた方でも、それから様々な障がいのある方でもアクセスできるとしたら、これは絶対的ではないけれどもかなり大きな価値があるのではと思ってきました。

展示物については、ほとんどの場合距離が近いといってもそれは間接的に視覚情報で見えていますけれど、私はあんまり目がよくないので説明の文字が小さくて見づらい。そして説明があまり詳しくない。それを補完する機能として、ネット上の電子的なものは非常に有効だと思います。

沖ノ島もそうだし、田熊石畑遺跡もそうだし、そこにいけば非常に価値のあるものを見ることができる。でもそこにいけない人は離れた所でそれに近いものを見ることができる。すると、その方にとっての想像力がたくましくなる。

沖ノ島がなかなかいけない場所であれば、電子的な展示はできるところまでやってみよう。実物がいいとか、デジタルがいいとかいうことではなくて、デジタル表現でどこまでできるかを挑戦する場だと考えています。

例えば石畑遺跡については、どのような形で一般の人達に見てもらおうのがいちばんいいとお考えになっていますでしょうか。

西谷：田熊石畑遺跡で銅剣・銅矛といった青銅器が出て来ますと、その現場を目撃というか観察できるのは非常に限られています。瞬間的な出来事ですよ。ある意味じゃ。調査しているそのときでないと見れませんので。その場合、写真はもちろん撮りますが、博物館の場合だったらパネル一枚で終わりますよね。場所がないですから。だけど、その現場を色々な角度から見ますから、状態が映像としては何枚も取れるわけですね。電子の場合は自由に何枚でも情報としてストックできて発信できますから、そういう点は有効じゃないか、効果的でないかと思うんですけどね。

私もこの頃小さなものが見えないんですが、それが電子の場合は自由に拡大できますからね。それと、いまおっしゃった障がいのある方とかですね。そういう方々が現地に行けないけれども、電子博物館の中では情報はうんと入っていて、目的に応じて見ることができるということですから。

伊津： 関連遺産については、宗像に行くとは保存状態は別として、現実のものにふれ、直接来た、そこに足で立つことができたという実感があると思うんですね。そこへ行くまでの間に、ほとんどの人がインターネットで情報収集をしますから、質・量共にきちんと提供して、そして行ったときに行ったという実感ができるようデジタルでもっていってあげることがとても大事だと思います。

もうひとつは古い文書や資料について、デジタルな環境の中で、今文化財資料のバックナンバーをそのままコピーしたものが電子博物館で閲覧できるようになっています。

これまで展示物としてなかなか公開されなかったものを、いかに電子的に公開していくか、宗像市の発掘品の収蔵庫は、それほど見やすくはなっていないので、それをいかに紙の資料を含めてデジタルにしていくか。

例えば、石畑遺跡について、その公開を宗像市が積極的にしていこうという気持ちがあれば、かなり色々な情報が世界に出て行くことになるので、研究の推進上にも非常に有効なことになるんじゃないかなと思っています。

こっちがいいかあっちがいいかという選択ではなくて、今の時代にデジタルでできる、なおかつ展示をしないことによってデジタルの部分しか持っていない博物館は、そのよさをいかに出すかということではいけないので、「むなかた電子博物館」が可能な限りやれるところまでやってみるということは、注目すべき点かなと自画自賛じゃないですけど、今思ったしだいです。

3.見る（映像）・聞く（音響）ことの重要性

西谷：日本の博物館は、昔の展示は物だけではなくて、パネル、文字とか、写真を併用していました。でも、最近の大きな流れとしては、それが映像とか音響とかそういうことで展示の幅、方向がだいぶ広がっていつているんですね。これからまさに電子面でおおいに活用していくというのは非常に重要だと思うんです。

伊津：国立民族学博物館の梅棹忠夫氏は、もう何十年も前に「民博は博物館ではなくて情報館だ」と盛んにおっしゃっていましたが、なかなか当時は理解されませんでした。今先生がおっしゃるみたいに、まさに情報デジタルな部分がかなり自由になってきたので、可能性としてそのところは考えなくちゃいけないのかな。

それともうひとつ、私がどうしても固執するのは、色々な障がいのある方に対して、デジタルだからできることをどこまでやっていけるかということですね。例えば目の見えない人がおでこにセンサーを当てると前にあるものの輪郭を、かなり精度よく見ることができると、どんどん進化している。実際にそういう人が博物館にいかななくても、情報をその人に送ってあげることができれば、かなりリアリティのある展示もできるかなと。科学技術の進歩というのは急速ですので、それを普通の博物館がすぐ取り入れようとしても難しいとすると、デジタルの博物館と言うのはその辺の方向性を色々と自由にできるので、多少予算を確保できればいいかなって思いますね。

博物館や展示館は、入場者からの入場料や寄付と言うのはあまり収益として考えられないのでしょうか？

西谷：そうですね。

伊津：ある程度理解が深まって、行政や一般の人達からの基金をいかに得るかということ。そういう点では日本は少ないかもしれませんが、海外の色々な美術館は、企業やその他のスポンサーを取って運営をしているというのを結構聞きますけど、国内ではあまり無いのでしょうか？

加藤：国立の博物館が独立行政法人に移行したのが契機になったと思いますが、例えば、東京国立博物館ですと企業や個人に対し賛助会員の制度を設けています。一定のスポンサーの代わりになるとと思いますが、そういった取り組みも進め始めています。ブリティッシュミュージアムとか、ルーブル美術館みたいに、徐々

に企業と博物館の付き合い方は、変わってきているのかなと思います。

伊津：沖ノ島だけが世界遺産としてあると、地域とはあんまり縁がないという感じですけど、関連遺跡群として石畑遺跡はかなりの位置を占めるんでしょうか？まだ今後の問題なのでしょうか？

西谷：時代が違いますので今後の問題ではありますが、出発点が田熊石畑ぐらゐから始まっていて、そして古墳が築かれていくということです。その関連遺産群が生まれる土台、出発点というんですかね。田熊石畑遺跡は2000年以上前の話ですけど、1700年前くらいになると、すぐ見えるところに東郷高塚古墳が築かれます。田熊石畑から300年後には東郷高塚に発展していくということでしょうね。その東郷高塚から関連遺産群に入っているわけです。時代は古いですけど、場合によっては関連遺産群の中に、出発点という意味では含めてもいいくらいですね。

伊津：石畑遺跡を吉野ヶ里と比較するとどうでしょうか？

西谷：吉野ヶ里では立派な墳丘墓のように、古墳のようなお墓です。あれと同時期かそれよりちょっと古い感じですが、地域にまとまった集団ができて、そのトップの人の墓という認識です。それがやがては前方後円墳へと発展していくわけですよ。地域集団が出来上がると、地域を治めるリーダーが必要になってくるのです。そういうリーダーが生まれて、そのような階層の人たちの墓だということですね。それがどんどん発展していくと、前方後円墳の築造となっていくわけです。

伊津：そうすると、沖ノ島の祭祀が非常に長い間続いて、そして、宗像地域に古い時代からの勢力があったとすると、沖ノ島の祭祀が長く続くためには、宗像地域が政治的に安定していた。その地域を治めるしっかりした集団があったからこそ、沖ノ島の祭祀が長期間続いていたというのは考古学上間違っていないのですか？

西谷：ええ。そうですね。特に当時国際交流が盛んになってきますが、その場合に非常に危険を伴う大海に船出していくわけですから、霊験あらたかな沖ノ島の神にすがっていったと思うんです。しかも国際交流が一宗像の交流じゃなくて、背後には、当時、倭国と呼ばれ日本全体の国際交流の中での祭祀ということですから、よく言われますように国家祭祀ということです。一地域の祭祀じゃなくて国家的に、国と国との大きな国際交流のときにお祭りをしたのではないかという位置

づけですね。

伊津：大陸との交易が盛んになった時代、大陸や朝鮮半島から九州へ来るときに、ピンポイントで狙ってくるという航海術はたぶんあったと思うんですね。そうすると沖ノ島のような灯台の役割をする場所というのが、非常に貴重であるということは、両方の民族にとって周知の事実で、だからこそ沖ノ島に近い地域というのが選ばれた。そういう点では田熊石畑遺跡と言うのはかなり重要なかつての交易のひとつの場所であったと推測するように思いますが。

西谷：まだ、田熊石畑の段階ではそこまでいってないですね。海辺では魚をとり貝をひろうとか、山に入ってイノシシやシカも捕り、そして、水田で稲作を行うといった生活が始まり広がっていくのです。その中で村々が集まってひとつの集団を作るわけですね。そのトップ、リーダーがそれにふさわしい立派なお墓を作ったという段階ですので、そこから外に出て行くとか交流はまだですね。

伊津：ということは、やはり宗像地域にとってあの遺跡はかなり大事なルーツになるわけですね。

西谷：出発点だということですよ。その後に前方後円墳を築くような大きな勢力に発展して行って、そこで大陸と交流を持つようになるのです。そのときに宗像・沖ノ島で祭祀をするようになります。さらに国が交流するときに、国として航海の安全、あるいは外交がうまくいくようにとか、そういうお祭りをするという位置づけですけどね。

宗像市は世界遺産の登録申請をしているわけですが、博物館がいよいよ必要になってきたんですね。世界遺産を申請するときには、将来博物館をつくりますという大きな条件があるんです。今後宗像にできる時に、今お話になったように、デジタル化を大いに取り入れた今までにない博物館をぜひつくっていただくといいと思いますね。

船で海を渡って島へのぼるという、そういうことが映像で、実際に行っているような錯覚を覚えるくらいの手法なんかも取り入れるといいと思いますけどね。ぜひ今までお話になっていることを、今度つくろうとされている博物館に大いに取り入れていただきたいと思いますね。実際の用途によって、お互いにそれぞれの特性を生かしながらですね。

清水：久々に九州歴史資料館を訪れ、座談会が始まる前に展示室を見てきました。そこで、今川遺跡を久々に見て、田熊石畑遺跡のさらに前身的な意味での今川遺跡の存在があったということを改めて思い出しました。デジタルの博物館のよさの一つに、例えば今川遺跡がポンと出てきたときにストーリーの中に追加しやすい、編集的な機能というのがデジタルのひとつの強みじゃないかなと思っています。

昨日も新聞を見ていましたら、近代化遺産の関係で、イコモスの専門家の方がこられてて、世界遺産のストーリー性の重要性についてのお話をされていたと思いますが、デジタルの素材というのは、ある意味色々なストーリーを作りやすいという条件がそろっているんじゃないかなと思いました。そういう意味で、活用の仕方というのは、専門家だけがひとつのストーリーを作るのではなく、関心がある人達がストーリーを作ることでもできる。そういう環境があることこそ、有効な手段ではないかという気がします。

西谷：このごろの子どもたちはすごいですね。中学生くらいなら電子博物館を見て自分でストーリーを作って夏休みの宿題を作るなど可能でしょうね。

伊津：今お話を聞いて思ったんですが、日本の美術館、博物館は著作権上、写真撮影をさせないとか、色々なデジタル情報を館内では展示するにしても館外にはオープンにしないことが多いんですけど、海外の博物館・美術館にいくと、かなり自由ですよ。メトロポリタンあたりだと、どんなものでも三脚をすえて邪魔をしない限りは、写真撮影が可能ですよ。日本の博物館、特にこちらの博物館等が、今話があったような、少し宗像の前の部分をこちらと電子博物館を共同で結んでいくとか、あるいは写真だけをストーリーとして組み込むということは可能でしょうか？

西谷：技術的には可能でしょうけど、版權とかはまた別の問題だと思います。

伊津：私が現実のものを借りる時には、現実のものが外に行ってしまうから、実際そこにあるものはレプリカを作るか偽物になってしまいますよね。ところが、写真とかデジタル情報について言えば、なんら現実に対して影響を与えないので、許諾とか使用の協定、使用権、あるいはライセンスをもう少し展示する立場として自由にやり取りできるようなことになっていく必要があつて。それが全国的には難しいにしても、このように遺跡が無数関連されている地域では、その地域の公共

施設等が、その協定を結んでいくというのがとても大事なことじゃないかなって思ったんですよね。

「むなかた電子博物館」が宗像のものだけに固執していると、電子博物館のよさが出てこないような気がして。その辺りのことを働きかけしていく必要があるなと、先生とお話をして思った次第です。

4.遺跡や展示物に関する公開情報の著作権について

平井：その著作権について、先生にご意見をお伺いしたいと思うんですが、考古学上はそういうものについての映像など、著作権についてはどのようにお考えですか。

西谷：それは色々ありますよ。さっき伊津先生がおっしゃったことで言えば、私は、日本は遅れていると思うんです。欧米では自由に写真も取れるし、大体入場料が無料でしょう。先日、当館で福岡県の博物館協議会の総会があつて記念講演をした時に、図書館は無料で入れるのに博物館はどうしてお金を取るんだと。ともに同列だと。常設展なんか無料にするべきだと言ったんです。まあ、特別展の場合はお金もかかるからですね。まず入場料の無料化の問題。それから撮影の自由化。もちろん全然別なものに悪用してはいけませんけどね。そういう点で日本は非常に遅れていると思うんですけどね。

宗像の博物館についても、その辺きちっと状況を整理されて、整備されるといいと思いますね。

私たちの場合でもどうぞご自由にと言う人もあれば、写真撮影するのに1点何万円とか、現実にあるんですね。本当に千差万別ですね。その所有者のお考えで。基本的には公的な機関、例えば宗像市教育委員会が調査した色々なものは、情報資料すべて公開して自由に使えると、そうあるべきだと思いますね。

個人あるいは法人の場合は、それぞれのお考えや、お立場がありますので、それはとやかく言えませんが、公的な機関でやっているものについては、すべて公開そして無料にすべきです。私は基本的にはそういう考えを持って、ことあるごとに言っております。

掲載許可とか、こういう目的で使いますとか、そういう手続きは一応踏んでもらうにしても、その辺の条件整備は必要じゃないかなと思いますね。「むなかた電子博物館」に出ている中でも個人蔵の写真なんかありましよう。それはやっぱり個人の方のお考えを尊重しなきゃいけませんから、見ていただくのは結構だけど、それをプリントアウトして何かに使うことはやめてくださいとか、条件が色々

出てくると思うんですよ。その辺は事務局で整理される必要があると思いますね。

平井：考古学でということよりも一般的にそういうことということですかね？

西谷：そうですね。考古学の場合は、教育委員会が色々と公的に調査しますので、原則的に公開ということをやっていますけれど、件数も多いし、量も多いからですね。だけど一般的な問題だと思います。

伊津：どこの地域もそうかもしれませんが、せつかく宗像に遺跡群が数々あるので、出てきたものだけピックアップして建物の中で1箇所に展示し、その近くで現物を見るという良さもありますけれども、どこまで復元できるかは別として、自然景観の中にできるだけ発掘・復元できるものは復元した状況で展示物があって、そこを回っていくことが野外でできるというのが、その地域へ遠くから来た人にとっては非常に価値があると思うんですね。宗像は、そういう展示の仕方は、無理でしょうか？

西谷：いや。むしろこれからやっていかなきゃいけないでしょうね。桜京古墳については、今埋め戻していますけれども、例えば、ガラス越しに内部あるいは壁画が見えるとかですね。それならもう一度きちっとした施設をつくらうという方向で考えようとする第1歩を踏み出しました。東郷高塚についても、今は森ですけども、露出展示はちょっと無理かもしれませんが、もうちょっと色々わかるように、石室の場合だったら、覆い屋をかぶせて中が見れるようにするとかですね。それはあちこちでやってることですけどもね。宗像もこれからはそういうことが必要になってくるでしょうね。

伊津：世界遺産にするために、博物館をつくるのは仕方がない。本当は積極的にしなければいけないんでしょうけど、どうしても収蔵しなければいけないもの以外で、その場所で公開できるものはできるだけ公開していくようにすると、宗像への文化的な観光というものにとってもかなりプラスになることですよ。

西谷：それは目的ではありませんが、結果としてそういうことになっていくと思いますね。

今問題になっている田熊石畑にしても、今保存という方向で動いてると新聞で見

ましたけど、埋め戻してしまっただけではその価値が引き出せませんからね。例えば、一部倉庫のあとを地上に復元するとか、あるいは青銅器がでてきたところにもう一度覆い屋をかぶせて見れるようにするとかですね。まず保存が一番ですけど、そのあと公園として整備し、それを活用していくことが大事です。生かすひとつに観光としての側面も出てくるでしょうね。当然そうなるでしょう。埋め戻してしまってここにありましたよだけでは、現在の生活に役立たないというか活用できない、そういうことが問題になってくるでしょうね。

平松：現実の博物館ができるまでの「むなかた電子博物館」は、現実の博物館のないというところで、どういった役目を担うべきでしょうか？

西谷：それはやはりせつかく資料があるわけですから、新しい情報をどんどん取り入れて、中身を充実させていくということがひとつありましようし、市民はもちろん、それを市内外の方々に活用していただくように啓発をすることでしょう。せつかくあるのに利用されないのではね。「むなかた電子博物館」のことが新聞に出たときは面白いなって思いましたが、その後の活動というか、どの程度中身が更新されたのか、利用者がどの程度あるのか、その辺よく知りませんが、もうちょっと宣伝して活用していただくということですね。それで博物館ができたら博物館と一体のものとして、実際の展示でもソフト面での利用もですね。そういうPRが肝要です。

実は昨日、前原市で会議があつて行きましたら、市議会議員の方が会いたいというのでお会いしました。来年1月1日に糸島市が誕生するんですが、それを記念に、市議会で糸島電子博物館を提案しようと思つているが、どうですかと言われるので、大賛成だと。実は宗像がすでにやっていますよと言つたら、ご存じなかったんですよ。こういう、輪が広がっていくといいですね。そのためにはやっぱり非常に有効で利用できるんじゃないかと。みんなご存知ないんじゃないかと思つています。

伊津：そういうこともあつて、平井さんは、紀要という紙媒体もどうしても必要だと言つてるんですよ。

平井：電子博物館という特殊なものではあるけれど、それでも普通の博物館と同じように裏方もたくさんものがあるんですよ。貴重なデータだとかこういう苦労をしたとか、そういうものを紀要という形で残して、次のステップにしたい

という評価があるということを、われわれは強調したいんですけど。

西谷：博物館という場合に、まずどういうものがあるかという基礎データつまり目録が必ずありますよね。それからその中の一部を図録でエッセンスとして出します。さらには日常的な調査・研究活動の成果は紀要として。まあ名前は色々あるんでしょうけれども。これらの3本柱でしょうね。どれが欠けてもいけません。日本の博物館は展示さえすればそれでいいという感じですね。展示のためにどれだけ皆さん調査し、研究しているかを知っていただきたいものです。結果として展示に生かされていますけれども、その過程の調査研究の成果がうもれているわけですね。当館の場合も研究論集という形で現在33集まで、毎年出ていますが、非常に高い評価を得ております。やっぱり必要ですね。

清水：平井委員が中心となって、研究紀要発行委員会を立ち上げていただきました。情報発信の意味もありますけれども、今回初めてなので、今までの3年間の成果を集大成していこうという考え方でまとめていくということがひとつです。今電子博物館の収蔵庫の中身がまだまだ足りない状況だと思うので、そこをまず充実させていく必要があるだろうと思っています。その一環として、今までの調査報告書をすべて全文見れるような形で出してきました。

西谷：全部を見ることができるようですか？僕はせいぜいタイトルと目次くらいかと思っていたんですけど。それは大変に結構なことですね。そうですか。実物の在庫はもう無いし、それは大変なことですね。

清水：もともと電子データとして残してた物もあって、それを今回電子博物館上で見れるような形にしています。

5. 「むなかた電子博物館」の将来について

平井：それでは最後に、電子博物館の将来はというテーマについて、改めてですね。こういうことは期待しますよということをしていただけると。

西谷：ひとつは今宗像市がこうしてやってこられて、そして、たまたま糸島市の話が出ましたが、これをどんどん広げていくというか、各市町村がやってくださって、お互いに連携できるようなネットワークというか、この輪を広げていってほしいですね。電子博物館は福岡県では初めてでしょうけど、九州では他にやってい

ますか？聞かないですよね？

清水：現物の博物館のないところで、電子博物館を運営しているところは他にないはずです。

星野：沖縄県はサミットの時期からデジタルミュージアムという形でやっていますね。デジタルアーカイブがモデルケースとして、国からの補助がおりたみたいですよ。

西谷：きっかけは何でもいいんですが、そういう輪が広がるといいというのがひとつありますね。輪が広がるのと関係なくは無いですけれども、例えば先ほどの世界遺産の話にしても、宗像市と福津市で一緒になってやっているわけですよ。宗像市ではなく「むなかた」と書いてあるのがみそでね。宗像市が事務的なことをやられるにしても、内容的には福津も含めた旧宗像郡で。漢字で宗像市と書いていない方がいいと思いますね。ひらがなで「むなかた」と書いてあることは。旧宗像郡というのは、奈良時代の郡が今まで続いているわけですよ。明治28年まで1200年間にわたって、コミュニティとしてそういう規模が適正だということだと思います。奈良時代にできた宗像郡が明治時代まで1200年続いたということですね。その後、小さな町が色々できて、またそれらが合併しようとしているわけです。ぜひそういうことにも留意されて、市の枠を超えて、一体のものとして環が広がっていけばいいですね。

伊津：今後も「むなかた電子博物館」は、例えば植物であるとか市史であるとか民俗であるとか天体であるとか、様々な地域の情報を研究展示するし、市としての資源を研究し、蓄積し公開していく場としてこれからの時代に意味がある。先生がおっしゃるみたいに、それをできるだけ広げていこうということは、今の時代、とても可能性のある夢のある仕事だという風に改めて思いました。

平井：地域の拡大というのは、電子博物館ではわりと優位にまとまっているかな。建物は管理の問題があるけど、情報ならネットになって立ち上がっていけばいいわけだよね。九州電子博物館になっていけばいいかな。簡単に言えば、その点はわりと容易ですね。

西谷：どうですか？九州歴史資料館も電子博物館を運営するというのは。

加藤：私たちも大変遅れておりますので、見習っていかなければならない部分が多々あると思います。私の普段の仕事に関連しますが、普段見れないもの、最近だとありえないような画像というのがあります。病院の検査でX線のCTというのがあります。それが最近文化財で九州国立博物館とか奈良の文化財研究所とか国のレベルの博物館、研究所で実用化されていますが、例えば仏像とかあるいは石畑の銅剣とか、ああいったものを輪切りにした絵を撮影できるようになっています。仏像を本当に輪切りにすることはできないので。中が見えないものを透視できるとかですね。そういうものは普通の博物館では、いずれ宗像に博物館ができたとしても、沖ノ島が世界遺産になったとしても、これは電子博物館でしか見れないものです。そういうなかなかありえないというものを個人的には見てみたいなと思います。色々な資源が宗像にはあると思います。

絵図とかでも小さく描いてある絵とかはなかなか肉眼では見れないので、普段博物館で見れないものがこういった媒体であると、個人的には見ることができるとかと思っています。

平井：ぜひ、ご協力をおねがいします。そういう時は、やっぱり著作権の問題があるんですよ。

加藤：そうですね。対象の資料が公的機関のものであれば、手続きで済む話だと思えます。行政の調査でかつ教材になっているものは比較的緩やかじゃないかなと思います。国民共有の財産ということですので、広く皆さんに利用していただく形がいいと思います。

平井：将来像に関してもお聞きしましたので、今のうちにご意見があったら。

西谷：先ほど沖縄がサミットの関係でモデル事業で行ったとおっしゃいましたが、実質的にはお金がずいぶんかかるとお思いますので、市の費用だけでは難しいでしょうから、そういうよその資金というのはいないんでしょうかね？いろんなところで補助事業とかやっていますけど。

伊津：問題は電子博物館をある程度の人達が進めているということがないと、その手続きをしたりということが難しい。デジタルに博物館があつて、こんなことをやっている、こういう意味があるんだということをお会いして伝えるために、今回

の紀要のようなものを作り、それを持って行って「むなかた博物館」あるんですっていうことを伝えることは大事です。

清水：ここの運営母体はこちらにいらっしゃるそれぞれ研究をおもちの委員の皆さんや、ボランティアで、ほとんど情熱でしていただいています。委員の皆さんも色々な企画をしてくださって。例えば北斗七星の水くみをデジタルで募集したりなど、企画部門もかなり色々活発にやっています。

西谷：それが一番大事ですからね。今度紀要をお出しになるということは、発足以来の新たなステップでしょうけど、先ほど話題になりました世界遺産がらみで、市として博物館が必要だという方向で動いていますから、その中にデジタルの博物館を一体のものとして取り込むといいですね。モデルになるような。博物館は改装されて、中はソフト面でいいのができると思いますけど。

伊津：実際の博物館をつくるときに、電子博物館の側面を取り込んでということですよ。

そして、物と電子と両方で有効に活用していく。

平井：世界遺産になるには、旧来の博物館では難しいんですかね？

西谷：そういうわけではないんですが、何も無いというのは困ります。説明するガイダンス施設と言うのが必要なんです。電子博物館は世界遺産の暫定リストに載る3年前からあったということで、先見の明があったんじゃないでしょうか？

田熊石畑遺跡については『宗像考古学』ウェブサイトが詳しい。(編集者注)

<http://munakatakouko.web.fc2.com/>



座談会参加者

上段左から；加藤、平松、清水、星野
下段左から；平井、西谷、伊津